

開けゆく岡山平野—岡山藩の新田開発

江戸時代までの開発

今から2000年以上前の岡山平野は、そのほとんどが海でした。岡山県総合運動公園から発見された津島遺跡は、弥生時代の大規模な集落遺跡で、岡山大学の津島構内からも弥生時代の水田遺構が発見されています。当時は、このあたりが陸地の最南端で、その先は干潟から海につながっていたと考えられています。

今から700年くらい前の中世の時代になりますと、岡山大学医学部のあるあたりまでは鹿田荘として開発されていましたが、その先はやはりまだ海でした。

旭川や吉井川という大きな川は、上流から多くの土砂を運んできます。しかも、これらの河川が海に注ぐ先には児島が控えていましたから、土砂が沖合まで流されることなく河口部に滞留して、長い年月の間に大きな干潟が形成されていました。しかし、大河川の水流を制御することは技術的に難しく、中世までは大河川の下流域の開発はなかなか進まなかったのです。それが漸く可能になったのが、400年前の江戸時代になってからのことでした。土木技術の進歩と強力な政治権力の存在がそれを可能にしました。

寛永期までの開発

岡山平野のうち、江戸時代の初めに開発されたのは御野郡の南部地域でした。このあたりの開発は、岡山藩の池田忠雄によって行われましたが、後のものと比べると規模はそれほど大きくはありませんでした。平福・福島・浜田・福富・泉田・福成・新福・福田・万倍などが、この時期に開発された主な新田です。

また、中世に侍であった者たちのなかには、新たに耕地を開発しながら、その土地に百姓として土着していくものも見られました。この時期のそうした新田の例として、御野郡では、和気氏によって開かれた米倉新田などが知られています。

池田光政と新田開発

寛永9年(1632)に岡山藩主となった池田光政は、藩政確立の一環として新田開発にも積極的に取り組みました。最初に手が付けられたのは、児島郡と備中国との境となる地域で、粒浦新田などが開発されました。また、上道郡の操山の南側の干潟でも、開発が進みました。しかし、これら大規模なものはありませんでした。

明暦2年(1656)光政は改めて新田開発を命じます。この時には、旭川と吉井川の河口を結ぶ一帯の干潟が対象になりました。翌明暦3年(1657)には「金岡新田」「中川前新田」「邑久郡ノ新田」の見立てが行われ、開発計画が立てられます。

このうち最初に手掛けられたのは、「中川前新田」の松崎新田の部分でしたが、万治3年(1660)請負人や村役人の不正が発覚し、それに関わって郡奉行の波多野夫左衛門が改易になるという事件が起き、一旦中止となります。しかし、その後藩の手によって工事が行われ、寛文3年(1663)に松崎新田は完成します。

「金岡新田」と「邑久郡ノ新田」については、寛文4年(1664)に鴻池仁兵衛ら大坂の商人たちが請け負って工事が始まり、寛文7年(1667)に金岡新田の一部が完成しました。しかし、その後藩と商人との間で紛争が起こり、結局、商人たちを排除して藩が工事を継続することになります。

社倉米と新田開発

新田開発に有力農民や商人などを請負人として頼まなければならなかったのは、藩に十分な資金力がなかったからでした。そこで、これ以降、藩営で開発を行うための資金源として注目されたのが、社倉米でした。

社倉米は困窮した領民に低利で融資する制度で、岡山藩では寛文11年(1671)に津田永忠の発案によって始められました。基金となったのは、本多忠平に嫁した光政の娘の奈阿子の湯沐料(妻女が身辺を整えるために支給された費用)一千貫でした。社倉米は、実際に領民の救済に役立った面があ

(1) 一解説

る一方、運用が村に強制されることもあったために、村方で紛争が起こることもありました。

また、綱政の時代になると、本来の目的から離れて、それが藩の行う様々な事業の資金として流用されるようになりました。

倉田三新田と倉安川

延宝6年(1678)津田永忠は社会米を使って領内各所で新田開発を行うよう指示されます。そして、翌延宝7年(1679)にその最初の事業として倉田三新田と倉安川の工事を命じられています。

倉田三新田は、以前「中川前ノ新田」の一部として計画されましたが、用水の用途が立たず、実現に至らなかったものでした。今回は、吉井川と旭川を結ぶ通船のための運河として倉安川を開削し、その余水を新田に取り込むことによって用水の問題が解決されました。この両事業は延宝7年中に完成し、同年10月19日には光政を迎えて倉安川の船路開きが行われました。倉田三新田の総面積は293町余り、耕地1町歩を単位とし、1町歩当たり銀300匁の夫役銀をもって払い下げ、当初50人の農民が入植しました。

幸島新田と沖新田

貞享元年(1684)からは幸島新田の開発に取り組みます。これは、「邑久郡ノ新田」としてこれまでも度々計画されたものですが、永忠によって漸く実現されました。この開発では、和氣郡坂根村井堰から吉井川の水をひく坂根用水が開削され、海上の大小の島々を結んで長大な潮留め堤が作られました。大水尾(遊水池)と樋門を結びつけた大規模な排水施設も作られ、永忠の持つ設計から資金・技術にわたる総合的な組織力が遺憾なく発揮されました。幸島新田の総面積は561町歩余りでした。

その後永忠は、しばらく後楽園の造営に精力を集中しますが、それが一段落した元禄4年(1691)から沖新田の開発に取り

掛かります。沖新田は、岡山藩が藩営で行った児島湾北岸での最後の新田開発でした。潮留め堤の総延長は6518間余り、総面積1918町歩余り、幸島新田を初めこれまでの土木工事で培われた技術を総結集した大規模な事業でした。

なお、幸島新田と沖新田では1反を単位として、1反当たり30匁の夫役銀を徴収する方式で、耕地の配分が行われました。これにより、小規模な農民が多数入植することになりました。これは、富裕層に限らず、より幅広い階層に配慮した政策と言えます。ちなみに、沖新田では入植直後の戸数が933軒、人数は5501人でした。

百間川と地域総合開発計画

沖新田の用水には百間川が利用されました。この百間川は、もともと、岡山城下を洪水の被害から守る目的で、増水時に旭川を上流で放水するために計画されたものでした。その最初の工事は寛文9年(1669)に始められており、発案者は熊沢藩山であったと言われています。その後この放水路は、低湿地の多かった上道郡の排水路としても利用されることになり、貞享3年から4年にかけて(1686~87)築堤と水路の開削が行われました。そして、これによって岡山城の北の低湿地の開発が可能となり、ここに後楽園が造営されます。

つまり、百間川の築造によって、城下の洪水対策、上道郡の悪水処理、後楽園の築庭、沖新田の用水利用、といった様々な課題の解決が図られたわけであり、倉安川の運河としての活用とあわせて、それはまさしく地域総合開発計画というべきものでした。そして、沖新田の完成はこの地域総合開発計画を締めくくるものであったのです。

展示品解説

びぜんこくきゅうぐんこす

1. 備前国九郡古図 (※T1-14) [複製] (原本は193.4cm×188.5cm)

「寛永古図」として伝えられるもので、寛永15年(1638)頃に作成されたと考えられている。村は、郡別に色分けされた小判形で示され、内に村名と村高が記されている。御野郡や上道郡などの南部に新田村が描かれているが、これらには村高は記載されていない。展示したものは、原図を60/100に縮小複製したものである。



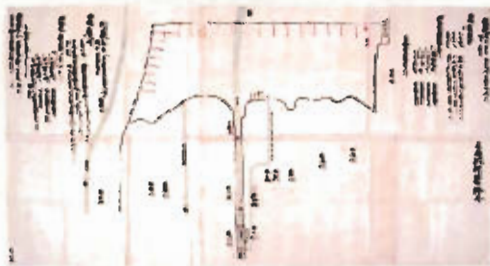
びぜんびつちゅうしんでんそうたかもくるく

2. 備前備中新田惣高目録 (84-9) 寛文4年(1664) 28.5cm×21.5cm

「高三百貳拾四石四斗三升」の「備前三野郡平福村」以下57カ村が書き上げられ、その総合計は「貳万五千九石六斗」となっている。本文末に「寛文四年三月廿日」とあり、慶安2年(1649)2月19日に改めた新田目録をこの時書き付けたもの。

じょうどうぐんしんでんしよえす

3. 上道郡新田所絵図 (※T7-100) 明暦3年(1657) 61.2cm×115.3cm



光政の新田開発についての指示に基づいて、「金岡新田」「中川前ノ新田」「邑久郡ノ新田」の三新田について、開発見積りを立てるよう命じられたが、

その際に作成された絵図。総面積は656町余り、総石高は1万100石余りであった。作成者の野間五左衛門は、上道郡の郡奉行である。

びようこくしにちろく

4. 備陽国史日録 (A1-11) 明暦2年(1656) 26.9cm×19.9cm

びようこくしにちろく

5. 備陽国史日録 (A1-12) 明暦3年(1657) 26.9cm×20.0cm

承応3年(1654)7月から寛文12年(1672)6月までの藩政の重要事項を、日次を追って記載したもの。藩の留方によって、「留帳」などから編集されたと思われる。ほぼ1年を1冊にまとめており、全24冊が残されている。

明暦2年11月15日は、光政が新田開発を指示した記事。

明暦3年8月8日の記事では、「中川前之新田」と「邑久郡之新田」の絵図を提出させ、それを見た上で、先ず用水の見積りをするように命じている。

じょうどうぐんしんでんのえす

6. 上道郡新田之絵図 (※T7-99) 79.6cm×94.2cm

松崎新田の開発計画図。松崎村の前に朱で堤が示され、「此内今度被仰付候新田」と記した付箋がある。松崎新田は、寛文2年(1662)に着工され、翌年完成した。なお、正保4年(1647)に開発された笠井新田・福吉新田や海面新田・円山新田・中川新田が描かれており、上道郡での開発の様子が分かる。



びようこくしにちろく

7. 備陽国史日録 (A1-15) 万治3年(1660) 27.2cm×20.2cm

掲示した万治3年8月10日の記事からは、松崎新田の開発につき不正があったとして郡奉行波多野夫左衛門が改易処分を受けたことが知られる。

びようこくしるいへん

8. 備陽国史類編 (A1-51) 寛文11年(1671) 27.6cm×20.6cm

承応3年(1654)から寛文12年(1672)までの藩政の重要事項を、項目別に編集して記載したもの。以後の「留帳」はこの形式で編集される。19冊が現存している。

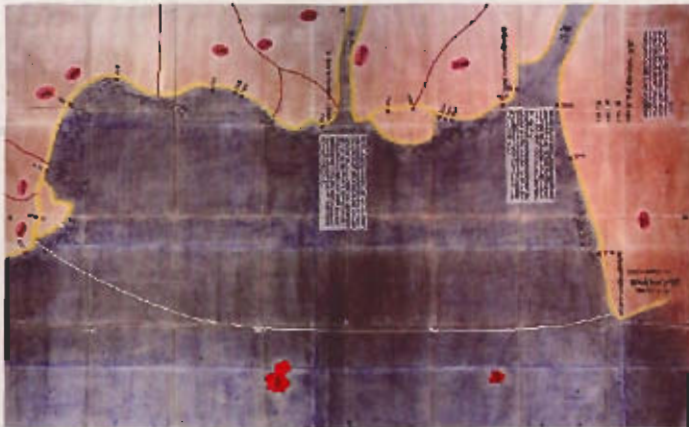
掲示したのは、大坂天満金屋三郎兵衛・同鴻池屋仁兵衛が金岡新田の開発から手を引くことを約束した証文(同年4月9日付)の一部。

じょうどうぐんおきしんでんかんとくまえのかいがんず

9. 上道郡沖新田干拓前之海岸図(※T7-95)

127.2cm×205.8cm

倉田三新田の開発計画図。延宝初年に作成されたものと思われる。川崎新田から金岡新田までを結んで堤を築くようになっており、後に沖新田として開発される部分を含んでいる。図中に三枚の貼り紙があり、結論として、用水・排水の関係で古地に障りがある点が指摘されている。



つだながただほうこうがき

10. 津田永忠「奉公書」(D3-1631)

27.8cm×20.3cm

奉公書は、岡山藩が家臣に先祖の由来や代々の勤役などの履歴を書き上げさせて、提出させたもの。光政が寛永21年(1644)に「先祖書上」を命じたのが最初で、元禄9年(1696)以降はほぼ5年ごとに書き上げさせた。留方が管理し、3423家のものが現存している。

津田永忠は、光政治世の末期から綱政時代にわたって藩の重要施策の立案・実施に関わった。延宝8年(1678)9月11日の記事は、永忠が新田開発を命じられ、その日用米は「重二郎作返之御米」(社倉米)から出すように指示されたもの。

おんとめちやうひょうじやうがき

11. 御留帳評定書(E3-9) 延宝7年(1679)

27.5cm×20.6cm

評定所の議事録。寛文8年(1668)から貞享2年(1685)までの14冊が残されている。評定所の制度は、正保元年(1644)に始まり、定まった式日に家老をはじめとした重臣たちが参加して、藩の政策を審議した。

延宝7年8月29日の記事は、倉田三新田の耕地を入り百姓に割り渡すことについて議している。

じょうどうぐんしんでんえす

12. 上道郡新田絵図(※T7-98)

80.1cm×110.4cm



延宝7年(1679)に完成した倉田三新田の絵図。新田地は、東から「倉益」「倉富」「倉田」と命名され、図中では色分けして示されている。最初の入植者は50人で、図中には51戸の藁葺きの家が描かれている。全体の開発面積は271町余り、貞享4年(1687)に行われた検地での総石高は、5004石余りであった。

延宝7年(1679)に完成した倉田三新田の絵図。新田地は、東から「倉益」「倉富」「倉田」と命名され、図中では色分けして示されている。最初の入植者は50人で、図中には51戸の藁葺きの家が描かれている。全体の開発面積は271町余り、貞享4年(1687)に行われた検地での総石高は、5004石余りであった。

じょうどうぐんおきしんでんりやくず

13. 上道郡沖新田略図(※T7-96)

81.4cm×78.5cm

当初の沖新田の開発計画図。干潟の形を描いた上に、開発予定地の堤を朱で示し、その長さを記している。その範囲は、9の絵図に示されたものとはほぼ同じである。開発地の中央に大きな水路を設け、耕地を東西に二分する設計になっている。

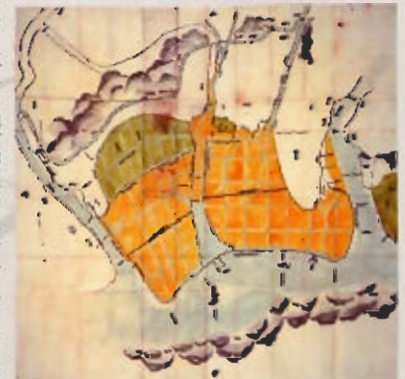


じょうどうぐんおきしんでんかいこんえす

14. 上道郡沖新田開墾絵図(※T7-94)

78.3cm×79.5cm

沖新田の開発計画図。13の絵図と比べると、さらに海上まで開発の範囲が広がっている。また、海に面した沖堤は東西に一貫して築かれ、中央の水路も直接海には排水せず一旦大水尾(遊水池)に集められるような構造に設計されている。下書きのような筆で百間川も書き込まれており、上道郡全体の用水計画と沖新田開発との関係も読み取ることができる。



展示品解説

びぜんこくじょうどうぐんおきしんでんす
15. 備前国上道郡沖新田図 (※T7-97) (表紙)
 114.6cm×142.0cm

完成後の沖新田を、100間を1寸に縮尺して描いた実測図。用水路が
 克明に記載されているだけでなく、樋、橋、戸樋、底樋、町間堀、分木な
 どまでが記号で記入され、大水尾の石樋と唐樋も正確に描かれている。

しゃそうかきつけ
16. 社倉書付 (※G8-74-9) 14.3cm×40.2cm

寛文11年(1671)に社倉米が始められた経緯と、延宝4年(1676)
 の綱政の指示などを記している。「朱子社倉米」について記した書付
 と一緒に包紙に包まれていた。

しゃそうかきつけ
17. 社倉書付 (※M1-58)

かんぶんじゅういちねんとらのくれざいざいおかしまい
寛文十一年寅ノ暮在々御借シ米 (※M1-58-2)
 27.9cm×58.5cm

社倉米の貸付状況を書き付けたもの。二万石で始まったものが、
 延宝8年(1680)書には利米が2万7908石余りになっている。
 郡別の内訳も分かる。

しゃそうまいのりぶんのうちをもつてだいままでとりたてそうろうおほえ
社倉米之利分之内ヲ以只今迄取立候覚 (※M1-58-1)
 延宝8年(1680) 28.2cm×32.6cm

社倉米によって実施された藩営事業として、関谷学校の維持、牧で
 の馬の飼育、倉安川の開削、倉田三新田の開発、田原用水の改修、
 を挙げている。

しゃそうまいにてとりたてのかいこんちめんせきおよびひがくてきろく
18. 社倉米ニテ取立ノ開墾地面積及費額摘録
 (※M1-29) 27.5cm×19.8cm

倉田新田、幸島新田、沖新田、福浦新田、井田村下井新田について、「津
 田氏旧記」などから普請の概要を書き抜いたもの。

とめちよう
19. 留帳 (A1-107) 貞享元年(1684)
 27.0cm×19.6cm

藩の留方が、各部局の記録や文書から行政上必要な事項を書き抜き、
 項目別に一年ごとに編纂した記録。承応3年(1654)から明治27年
 (1894)までの336冊が現存している。藩政全般について知ること
 のできる基本史料。

掲示したのは、御野郡平瀬村の内宮本の与三郎と庄屋助七との間の紛
 争の記事。事件の発端は、「重二郎様之借銀」(社倉米の貸付)を庄屋
 が取り立てようとしたことであった。

おんひょうじょうがき
20. 御評定書 (E3-1) 寛文8~9年(1668~69)
 27.6cm×20.0cm

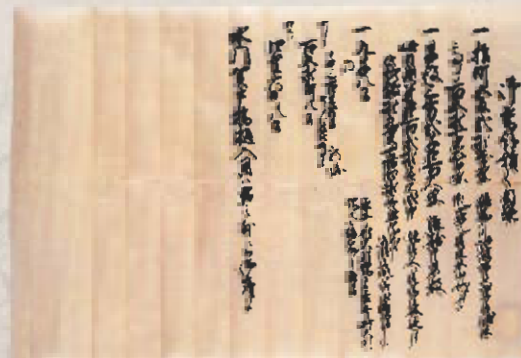
おんとめちようひょうじょうがき
21. 御留帳評定書 (E3-5) 延宝3年(1675)
 27.3cm×20.5cm

寛文9年5月10日の記事は、旭川の放水路について最初に見分を命じ
 た時のもの。この計画が、熊沢番山の発案によることが分かる。
 延宝3年1月21日の記事は、倉安川開削についての郡奉行春田十兵
 衛の提案。

おくじょうどうぐんくちじょうどうぐんふなとおしみぞのす
22. 奥上道郡口上道郡船通溝之図 (※T7-49-1)
 79.7cm×108.5cm

こふしんつもりのもくろく
23. 御普請積之目録 (※T7-49-2)
 28.1cm×41.3cm

倉安川の開削計画の全体を示した絵図。倉安川の新堀部分は、黄色で
 描かれている。倉田三新田の開発以前のもので、その開発予定地が簡
 略に記されている。
 添付の書付は、工事の見積書で、平井村旭川端から西井村吉井川端ま
 で9008間の用水の内、新堀の部分は1324間、この溝掘りの人夫数
 は3万2400人余り、とある。



あさひかわとうぶえず

24. 旭川東部絵図 (※T2-97)

86.2cm×78.4cm



袋上書きに「御ちん(亭)よりみゆる北ひかし(東)の方の山在所」とあり、図中の城の位置に「御らん」と記した貼り紙があるので、藩主が城から眺望するために作られた絵図だと思われる。図中に黄色で百間川が描かれ、三つの荒手も見える。

じょうどうぐんくらやすがわえず

25. 上道郡倉安川絵図 (※T7-40)

60.4cm×611.6cm

倉安川の全長を細長く描き、巻子に仕立てたもの。各所に、樋門、底樋、橋などの細かな情報が書き込まれている。巻末近くに「安政三年丙辰四月調之」とあり、この年に作成されたものか。題箋に「元津田家蔵」とある。



おくぐんしんでんえず

26. 邑久郡新田絵図 (※T7-109-5)

95.1cm×82.2cm

邑久郡の幸島新田の開発計画図。寛文7年(1667)に完成した金岡新田の名が見えるので、それ以降に作成されたものと思われる。幸島・大羽島・中羽島などを繋ぐ潮留め堤を築いて、入り海を大規模に埋め立てる計画であった。この段階では、用水は、福井村鶴越井堰から吉井川の水を引き、射越・新池・五明を通過して千町川に合流させる計画であった。



こうじましんでんのず

27. 幸島新田之図 (※T7-102)

114.6cm×112.4cm

幸島新田の完成図。新田は黄色で示されている。用水は、当初の計画が変更され、和気郡坂根村井堰一ノ口から引水する既存の水路を延長し、千町川を底樋で越えて利用した。これを坂根用水という。面積は当初の計画の約半分、総石高は1万241石余りであった。



とめちょう
28.留帳(A1-104) 天和3年(1683)
 27.2cm×19.5cm

天和3年12月19日、幸島新田の開発が指示された時の記事。

びょうき
29.備陽記(A2-1~16)

郡奉行などを歴任した岡山藩士の石丸定良が編纂した地誌。記述も正確で、利用価値が高い。35巻16冊。巻10から巻19までは、領内各村の明細を郡ごとに記す。

掲示したのは、巻第十六邑久郡の内、幸崎村の箇所。幸島新田は、幸崎・幸田・幸西の3ヵ村に分けられた。

おくじょうどうぐんふなとおしかわすじえす
30.奥上道郡船通川筋絵図(※T8-56)
 延宝2年(1674) 221.8cm×134.2cm



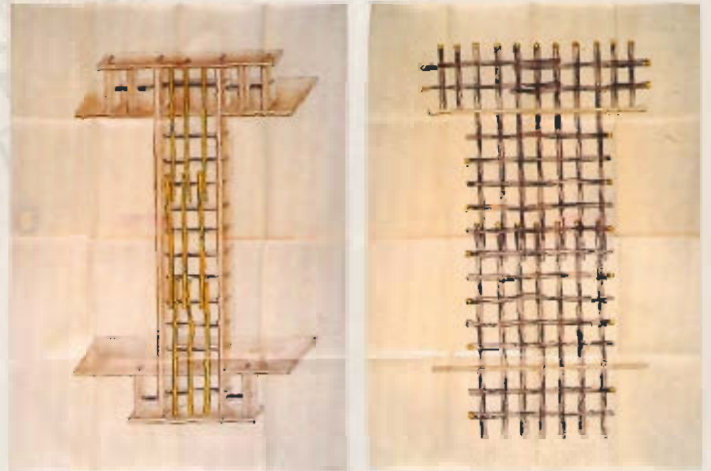
あさひかわすじのす
31.旭川筋ノ図(※T8-107)
 57.8cm×163.0cm



倉安川の開削に関する絵図。22の絵図の下図が。30には吉井村吉井川端から広谷村までの奥上道部分が、31には広谷村から平井村旭川端までの口上道部分が、二枚に分けて描かれている。船通し川に用いる「古溝」を墨書で、古溝を結びつけるために新たに掘られる「新川」の部分を朱書で示している。

すいもんくみたてのす
32.水門組立之図(※T7-57-1-6)
 55.3cm×39.8cm 55.3cm×39.8cm

包紙に図6枚と書付1通が包まれており、上書きに「水門組立之図」とある。いつの、どこの工事のものかは不明。この2枚は、樋の木組み構造を示したものの。



すいもんくみたてのす
33.水門組立之図(※T7-57-4-5)
 39.7cm×46.5cm 41.2cm×69.3cm

同じ包紙に入っていた6枚のうちの2枚。水路が交差する地点などで構築された底樋の構造を示した図。

